

社団法人

俳人協会報

1973年

5月

No. 49

社団法人俳人協会第二回通常総会開催

——昭和四十七年度通常総会——

昭和四十七年度通常総会は、去る三月三十一日(土)、東京赤坂プリンスホテル(クイーンルーム)において開催された。

午後一時四十分、響田進幹事司会のもと、皆吉爽雨常務理事の開会の辞。ついで、司会から、正会員数一五八六名、出席者一五二名、委任状提出者一二六一名で、総会成立が宣告された。

定款の定めにより、水原秋桜子会長が先ず議長席につき、『俳人協会も法人化して一年、この間に随分といろいろな仕事をこなしてきた。関係者の方が、みな練達の土ばかりで、内部の具合もまことに宜しく流れるようにことが運んでいる。大変結構な次第で、今後とも一層充実したものにしたい。』と、ただならぬ

決意を示された。なお、本来なら、議長役をとめねばならないのであるが、都合で、大野副会長に委任したいがと図られ、満場大拍手をもって了承。大野林火氏議長席につき、会が進められる。

一般経過報告を安住敦理事が行う。
『会員の状況については、昨年三月二十五日第一回総会の時点で、会員数一八二名、その後新会員四二二名、逝去一三名、退会四名、差引総会員は一五八六名となっている。なお、新会員の推選は、新しい方法として、理事会で結社別に新会員の定数をきめ、各主宰者に推選を願った。本年度もその予定でいる。結社といっても、いわゆる親雑誌、子雑誌があるが、それらはすべて親雑誌の主宰

に、子雑誌を含めて、推選して頂くこととした。』

ついで、正式の議案事項に入り、第一号議案「昭和四十七年度事業報告および決算」について、先ず草間時彦常務理事から別掲の通り詳細な報告があり、更に松崎鉄之介理事から、予め配付の協会報(第四八号)所載の決算報告書について、



細目にわたったの説明が行われた。続いて、五所平之助監事から、決算内容確認の監査報告があり、質疑なく全員賛成で、第一号議案は提案どおり承認された。

第二号議案「昭和四十八年度事業計画及び予算」に移り、草間常務理事からこれ別掲のとおり事業計画案の説明があり、続いて角川源義常務理事より、俳句文学館建設の経過について別掲の通り詳細な説明を行い、あわせてこの悲願ともいうべき計画の実現について会員各位の心からなる力添えを要望。松崎理事からは、決算同様事前配付のプリントによって予算案の各項について詳細にわたる説明があった。採決の結果、異議なく全員賛成、原案どおり可決された。

第三号議案「定款の一部変更」については、岸風三樓常務理事から、定款第八条を変更し、正会員の入会金三千円を五千元に、また、同年会費二千円を三千元にそれぞれ改訂したい旨を語り、一同賛成可決した。

以上をもって、予定の議案をすべて滞りなく審議可決し、福田夢汀理事が閉会の辞を述べ、総会は無事終了した。

引続き、その席において第十二回俳人協会賞の授賞式が執り行われた。

○第十二回俳人協会賞授賞式

既報の通り、今回の受賞は、岸田稚魚氏である。満場の暖い拍手の中に、秋桜

子会長から賞状および副賞の授与のあと、山田みづえさん（鶴同人）から花束の贈呈があり、秋元不死男副会長から心のこもったお祝いの言葉が送られた。これに心えて岸田稚魚氏は「身に余る光栄で面映い。昔往、岸田昌寿が私の作品に触れて、波郷先生に『稚魚の俳句は小手先の作品である。』と言うと、先生は間髪を入れず、『指先の芸だよ』と言われた。じゃ、指先の器用でどの位の作句ができるかやってみますと、小生意気なことを言った。遙か昔のことであり、その波郷先生も、昌寿も今は亡い。今日、俳人協会賞という一つの判定を下されて、感激深いものがある」とユーモアを混じえた挨拶。全員拍手をもって祝福のうちに、授賞式を終る。午後三時であった。

○懇親会

総会、授賞式ともすべて滞りなく終ると、部屋をマーガレットルームに移し、恒例のたのしい懇親会となった。

岡田日郎幹事司会のもと、富安風生顧問の挨拶、山口青邨顧問の乾杯で幕がひかれた。

卓上には山海の珍味が並べられ、ほのかに春の音楽が流れる中、あちこちで歓談爆笑、コップを高くさし交わしている風景は実に和気藹々たるもの。そしてなお尽せぬ名残を惜しみ乍らも五時前、原裕幹事の手メで幕を閉じた。

○評議員懇談会

総会に先立ち、当日午前十一時から同じく赤坂プリンスホテル（右近左近の間）で恒例の評議員懇談会を催し、総会への付議事項を中心にいろいろと意見の交換を図った。

〔出席評議員〕 石井桐陰、大竹孤悠、京極杜藻、島村茂雄、中村春逸、細木芒角星、三宅一鳴

〔出席理事監事〕 秋元不死男、大野林火、安住 敦、有働 亨、角川源義、岸風三桜、草間時彦、香西照雄、福田蓼汀、松崎鉄之介、皆吉爽雨、遠藤梧逸、五所平之助

〔出席幹事〕 池上樵人、上田五千石、岡田日郎、岸田稚魚、榊田 進、林 翔、原 裕、村田 脩、山崎ひさを

（山崎ひさを）

△総会出席者▽

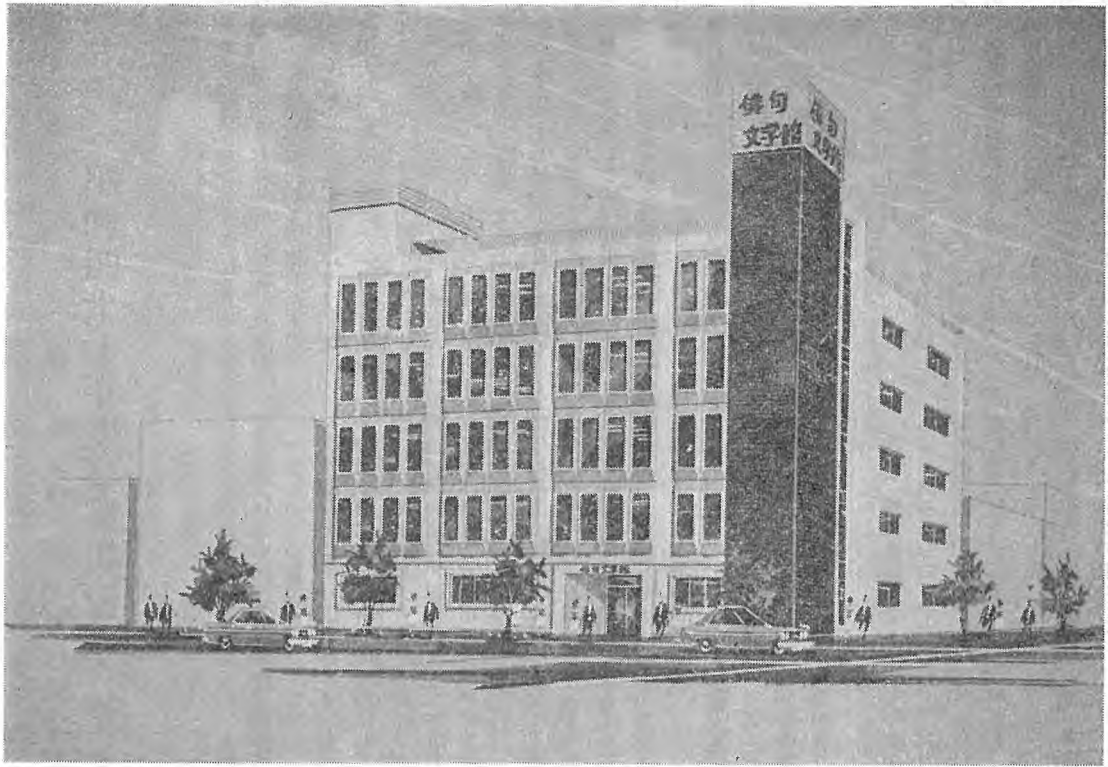
有馬籌子・青柳志解樹・秋山夏樹・安住 敦・秋元不死男・新井石毛・阿片瓢郎・有賀辰見・池上樵人・石井桐陰・稲垣きくの・今泉宇涯・石野まさ子・今枝 蒔枝・梅村好文・有働亨・内山せつ子・上田五千石・遠藤梧逸・尾形不二子・小川斎東語・大竹孤悠・大野林火・奥村遼牛・及川 貞・岡田日郎・岡本 眸・大須賀浅芳・角川源義・河上風居・片岡一窓女・甲斐虎童・河合未光・岸部秋燈子・岸風三桜・岸田稚魚・木村蕪城・北中富士子・久保紫雲郷・草村素子・草間時彦・黒田晃世・榊田 進・榊原希伊子・小泉もとじ・小松順風・今 棧一・古賀まり子・五所平之助・小畑耕一路・小久保水虎洞・香西照雄・甲田正枝・佐藤春子・真光葉舟・澤木欣一・佐竹華枝・佐野美智・櫻木俊晃・椎名書子・篠田悌二郎・柴田白菜女・菖蒲あや・島村茂雄・鈴木富来・菅井富佐子・鈴木白祇・鈴木真砂女・菅原胡馬・千賀静子・曾根けい二・田鎖雷峰・鷹羽狩行・竹馬規雄・千葉 仁・辻村真砂女・角田独峰・都筑智子・殿村菟絲子・富田直治・富田一鷹・富安風生・長倉閑山・成瀬櫻桃子・中村春逸・中火臣・中戸川朝人・中村行一郎・中村世紀・西山 誠・野沢節子・能村登四郎・野竹雨城・野溝不二相・野口白城・野島寿美子・長谷川浪々子・羽村野石・林 翔・原 裕・花岡 昭・樋口玉藤子・樋笠 文・福原十王・福地愛翠・

福田蓼汀・福永耕二・藤井晴子・古内一吐・細木芒角星・細井みち・星野紗一・星野石雀・松崎二溪・町田しげき・松崎鉄之介・松岡凡草・牧瀬輝之助・松本旭・松本澄江・宮下麗葉・三ヶ尻湘風・宮沢常四郎・三浦美知子・皆吉爽雨・宮下翠舟・三浦千代・三浦青杉子・皆川盤水・峰尾北兎・南ひさ子・向井泉石・村山古郷・村田 脩・村尾香苗・森田峠・本山卓月子・山田句蓮洞・山崎一溪・山崎ひさを・山田みづえ・柳下良尾・八木沢高原・山口青邨・安川綱雲・吉田巨蕪・吉井敬天子・横溝養三・吉野義子・吉田 鴻・若木一朗・和田暖泡

（以上一五二名）



水原会長から俳人協会賞を授与される岸田稚魚氏



↑俳句文学館完成予想図

俳句文学館建設計画に関する経過報告

(1) 俳人協会は、昭和三十六年十一月、任意団体として発足、昭和四十六年十年を迎えた。

それを記念し、且つ協会事業の飛躍的発展を図るため、組織を「社団法人」とし、併せて「俳句文学館」設立の件が総会で決定された。

同時に、建設資金として会員各位からの募金をお願いしたことは御承知の通りである。

(2) 募金状況については、昭和四十六年当初の会員八五〇名にお願いしたところ、約七割にあたる五七八名、および結社からの特別御寄付等あわせて総額八二九万五千円が集まりました。

それらについては、御承知のとおり、社団法人俳人協会設立のために五〇〇万円は基本財産に組み入れ、残額三〇〇万円は従来の任意団体当時の剰余金および四十六年度の利益金とを併せて七〇〇万円を文学館建設積立金として保有している。

そして、四十七年度に第二次募金を行ない四十六年度に加入された新会員および第一次募金の際お忘れになった向きもあるようでしたので、そういうお方にも

お願いしたところ本年三月末すでに約二〇〇万円の御寄付があった。

(3) 一方、運動の具体的な進め方としては、問題が極めて複雑多岐にわたっていることもあり、協会本来の事業とは別に、特別委員会を組織して強力に推進することが好ましいということが理事会において決定された。

そこで、とりあえず角川源義委員長の他、左の方達に委員になって貰っている。

〔委員〕 安住 敦・有働 亨・加倉井 秋を・岸風三樓・草間時彦・轡田 進・五所平之助・鈴木杏一・鷹羽狩行・中火臣・成瀬桜桃子・松崎鉄之介・皆吉爽雨・山崎ひさを・柳田静爾楼・村井隆

(4) 委員会は、それぞれ手分けをし、関係機関との接衝、陳情あるいは情報を集取しながら、月一二回定例的に会合を催すほか、事案に応じ随時打合せをし早期実現に努力している。

幸い、各界の有識者からも多くの理解と協賛を得るので一応明るい見通しを持っている。

しかし乍ら何分にも大事業であり、極めて多額の経費を要することなので会員

各位には一層の御支援を仰ぐ次第である。尤もこの事業は、現在の協会だけの力では到底為し得ないことであり、同時に、極めて公共的資格を持つものなので、国の助成をも得なければならぬが、先ず、その前にわれわれ会員自身が熱意をもって対処しなければならぬものと思料する。

このことは、これまで接渉した各関係者からも指摘されたところなので、重ねて各位の御支援をお願する次第である。

(5) ところで、現在の構想としては、

先ず、組織であるが、これは資金関係および運営上から「財団法人」とするのが好ましいという結論に達している。従って、現在の社団法人俳人協会とは表裏一体となって活動を行なうこととなる。

事業としては、単に図書館の機能、乃至博物館の機能にとどまらず、個人および共同研究の場にも提供したい。また、社団法人俳人協会の事務所もこの俳句文学館に置くことになる。

(6) 会館の規模については、敷地三〇〇坪、建坪一〇〇坪(五階建)延面積五五〇坪。収容図書二万冊。

(7) 経費としては、用地購入費として約二億五千万円、建物関係二億円。すなわち建設関係費として計四億五千万円。

その他、運営資金として約四億円ほどあることが望ましいという基本方針のもとに進めている。

そして、できれば昭和五十年中には完成したい目途である。(角川源義)

俳人文学館建設基金寄付芳名(二)

(個人 一口 三、〇〇〇円)

泉越二郎、赤間倭子、安部小芦角、池田さだを、石川静雪、石塚友風子、磯野莞人、伊藤敬子、伊藤四郎、出光牽牛星、稲垣法城子、岩井野風男、巖寺堅隆、岩崎照子、上沼芋半、大木異郷、大楠静波、大林唐子郎、尾亀清四郎、小川芥東語、長田等、落合水尾、甲斐虎重、海城わたる、笠原菜来、梶大輔、勝又水仙、葛山たけし、加藤春彦、金本冬雲、唐沢武人、川口爽郎、河口游子、川越蒼生、喜多牧夫、木村滄雨、木村三男、窪田鱒多路、栗間歌史、黒坂紫陽子、小坂橋山梶子、小佐田忠男、児玉小秋、駒木逸歩、小松しげる、斉藤夏風、坂口匡夫、佐藤把雲、佐之瀬木実、塩尻青菰、篠原清子、清水基吉、下田青子、城野としを、薄多久雄、鈴木富来、鈴木りう三、曾根けい二、高木三餘子、高崎小雨城、高橋柿花、高橋よつ女、高木時子、立木杜夫、田中芥子、田中英兵衛、田中七草、田中未智磨、田中朗々、谷口秋郷、玉置石松子、田元北史、高橋研吉、東条素香、鳥羽とほる、長繩駿人、中原冴女、中林美恵子、中村静子、中山一路、西村

青渦、新田祐久、野崎竹又、橋本月登、橋本大三、橋本美代子、畑伝一郎、埴あさ子、林十九楼、原通、土方秋湖、藤井秀雄、藤岡筑郎、藤野月人、細川加賀、細見しゅこう、堀端葛花、本多静江、保坂伸秋、松波陽光城、松本重雄、丸山泉雨、三浦青杉子、皆川白蛇、三野虚舟、宮崎一三、宮本白土、村沢夏風、村田黒潮、村松ひろし、森本嘯天、八木沢高原、安田閑々思、安良岡昭一、山崎恭村、山崎ひさを、山崎莖村、山下寿美、山田桃晃、山畑祿郎、吉井敬天子、吉岡恵信、吉村千秋、若月瑞峰、渡辺苔波、和田常一。

(一口合計 一二六名)

(個人 二口 六、〇〇〇円)

新井南一、安藤袖青、岡本眸、勝木新二、桜木俊晃、武田無涯子、新津香芽代、藤井晴子、古橋路吉通、細井みち、美濃真澄、村尾香苗、山下ふさを。

(二口分合計 一三名)

(個人 三口 九、〇〇〇円)

飯島蘭風

(個人 五口 一五、〇〇〇円)

阿部みどり女、稲垣陶石、岡達草、大須資浅芽、金井翠角、宮原季夫、桜庭梵子、霜島和子、鈴木みどり、杉山十四雄、二松葦水、松原昌一、三ヶ尻湘風、横山万兆、吉岡泰山木。

(五口分計 一五名)

(個人 五口、〇〇〇円)

上条筑子

(結社 一口 一〇、〇〇〇円)

火星、北の雲、漣、白鬼火、春嶺、万

蕾、絲瓜 (七社)

(結社 二口 二〇、〇〇〇円)

駒草

(結社 二五、〇〇〇円)

桑の実

(結社 五口 五〇、〇〇〇円)

風花

(昭和四十七年十二月末現在)

合計 九〇五、五〇〇円

俳句文学館建設打合せ会開催

国会議員を囲み真摯かつ前向きに

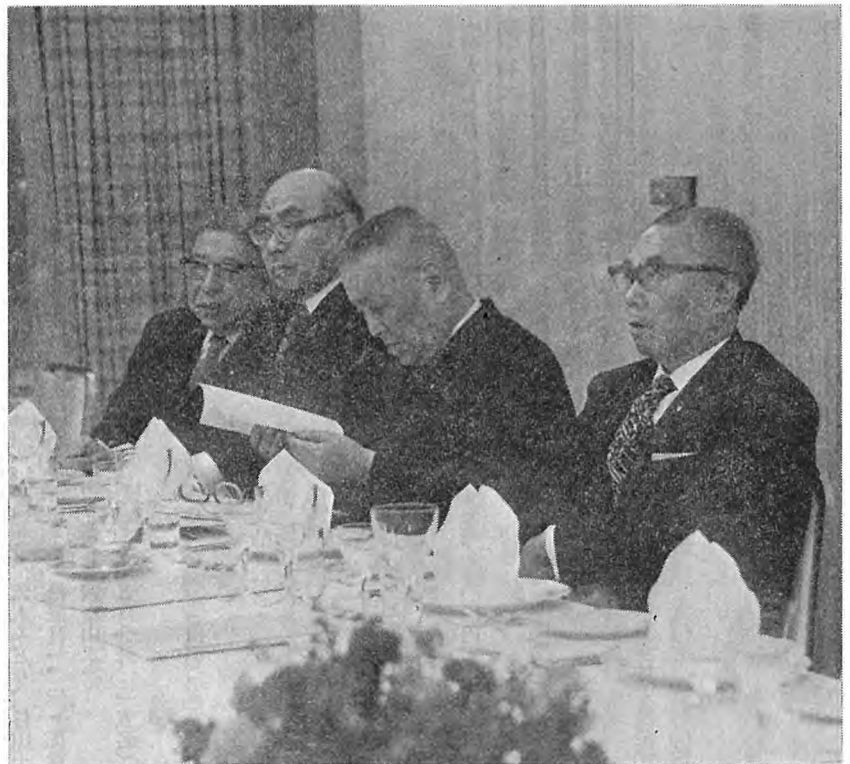
俳句文学館建設の企画を更に具体的に前進させるため、去る二月一日、午後六時より赤坂プリンスホテルにおいて衆参の国会議員（元議員を含む）と俳人協会幹部の打合せ会を催した。

折柄、国会開会早々で極めて多忙の中を十三名の国会関係者の出席を得、各議員から強い激励と協力方の確約を与えられたことは大きな収穫であった。

定刻、岸理事の司会進行のもと、まず水原会長ついで富安顧問が立って、これも俳句文芸館にかける俳人協会一九の熱意と強い願望を披瀝し、是非とも早期にその実現を図り、俳句文化財の後世への伝承に万全を期したいと挨拶する。協会事務局が、今日のこの大切な会議のために準備した諸資料は、俳句文学館設立趣意書、同要望書、俳句文学館完成予想図（カラー写真）、俳句文学館建設概要、財団法人俳句文学館寄附行為草案および

社団法人俳人協会の葉の諸点であり、関係委員の情熱がこめられて、今日の出席者の手もとに配られている。

角川理事が立って、文学館建設の基本構想を説明。『実は、昨年俳句文学館の構想をもって、当時の文化庁長官今日出海氏にお目にかかったところ、二つの点を強く示唆された。一つは財団法人とすることであり、一つは国会議員の諸先生方の御理解と御協力とを得ることである。その後、十二月の総選挙その他で、荏苒今日までご懇談の機を得ることができなかつた。内閣統計局の数年前の調査によれば、全国の俳句愛好者の数は約七百万人となり、今日では一千万人に達していると思われる。こういう広い層にわたる俳句作家ないし俳句愛好者が、いわば現代の日本の社会を支えている良識派の人々であると言っても過言であるまい。また、家庭生活の変様、特にいわゆ

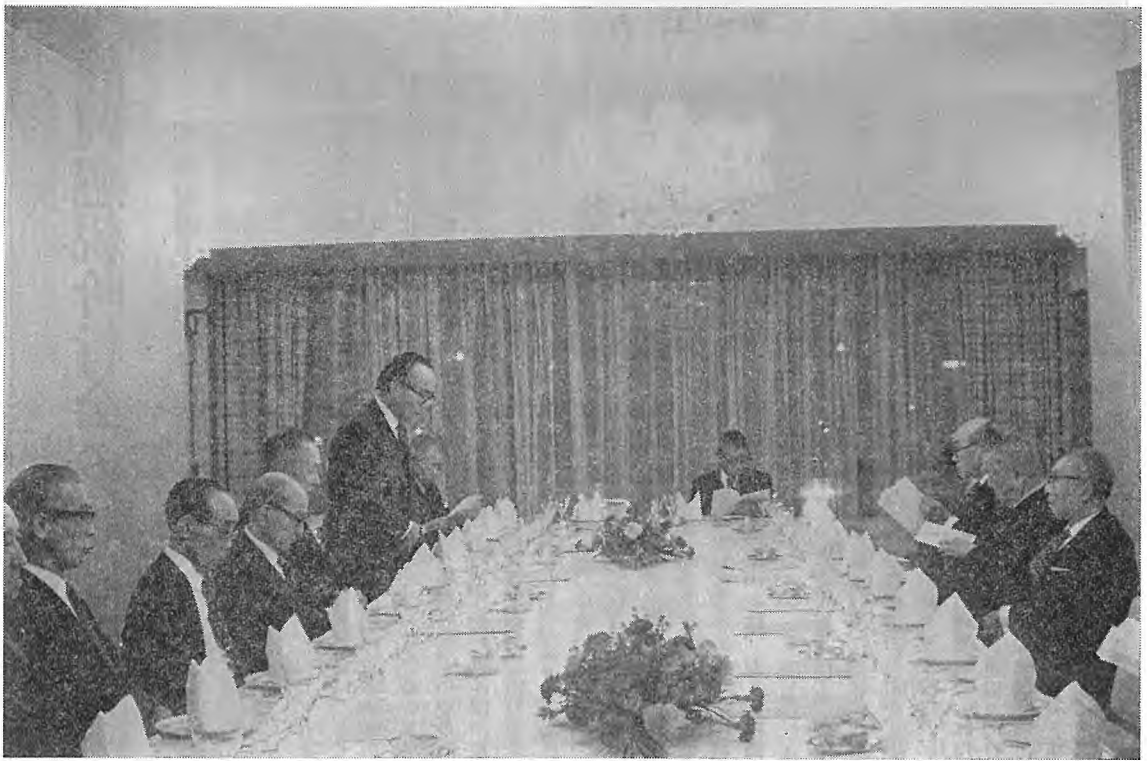


↑写真左から、井出一太郎、水田三喜男、菅野和太郎、草野一郎平の議員諸先生

る核家族化の進展に伴い、老人高年令者の生甲斐の問題が生じており、この面でも俳句がひとつの功德となり、老人福祉への心の面での大きな寄与を果している。あるいは、俳句の真価がアメリカを中心として海外で強く認識され、国際的にも大変なブームを呼んでいる。それにつけても、この今日の隆盛な俳句界の中にあ

って、毎日毎日絶ゆることなく生みだされてくる貴重な文献、資料を計画的、体系的に収集整備し、大切に後代に伝承してゆきたい。

文学館建設のあらまは、只今お手もとお配りした通りである。引続き岸理事から詳細説明させて頂くが、ひとつ私どもの意のあるところをお汲みとり下さ



って、格段の御高配とお力添えをお願いしたい。』

この総括説明をうけて、岸理事が詳しく計画内容に触れつつ、補足説明を行った。『お手もとのカラー写真（※別掲）が私どもの構想するいわば「まぼろしの会館」の完成予想図です。極めて遺憾なことに、まだ具体的な建設用地が決っていない。是非、先生方のお智慧とお力にすがって、一日も早く候補地を選定し、でき得れば国有地の払下げを受けたい。会館建設の基本構想は、俳句資料センターとしての機能を核とし、それに閲覧、研究、リファレンスサービス並びに集会の機能を加えてゆきたい。敷地面積三百坪、立地条件は環状線周辺の交通便利の地、そこに鉄筋コンクリート地上五階、地下一階建、延五〇坪の会館を建設する。図書雑誌の収容能力は二四万冊を目標規模とし、マイクロフィルムその他近代科学の粋を十二分にとり入れ、アカデミックでしかも親しみ易い開放的な国民の俳句文学館としたい。勿論、われわれ自身の手で、資金を集め、計画を進めなければならぬが、何分にも所要総経費八億円余と見込まれ、この早期実現のためには、国民の広い支援を仰ぎ且つ、極めて公共的なものであるので、国の補助をも得たい』

熱情こめた両理事の説明に、出席の国会関係者は熱心にかつ注意深く聴き入り、すぐさま問題の核心に触れた話合いとなる。国会関係者の一人一人が立って、俳句文学への強い関心と時には実作者としての自己の歩みを述べ、その上に

立ってこの構想がきわめて時宜を得たものであること、構想の具現化にあらゆる協力と努力を惜しまないことを力強く陳べられた。

尤も総額八億円となると仲々一遍でという訳にもゆくまい。今日の出席議員が中心となって国会議員としても最大の協力をするが、まず俳人協会側において資金調達の原案をより具体的にまとめてほしい。それによって、智慧を出した力ともなりたい。

◇募金にメドがつけば、当座、銀行から所要資金を借入れるという方途も可能であらう。

◇いずれにせよ、財団法人の設立認可と、大蔵省の寄附金免税措置の許可とを早く得ることが第一である。

◇国有地の払下げについては、大蔵省（理財局）が窓口ということになるが、早急に具体的な候補地を絞ることができないものか。この面を煮つめてゆく必要がある。

〔当日出席者〕（五十音順）カッコ内俳号
 国会側 井出 太郎、今泉正二（二笔齋貞鳳）、宇野宗佑（稔子）、大久保武雄（橙青）、菅野和太郎、草野一郎平（鳴崑）、桜内義雄（秘書代理出席）、菅波茂（茂）、藤波孝生（孝堂）、水田三喜男（京子）、麻生良方、永田亮一（恬水）、真鍋儀十（儀十）。

俳人協会側 水原会長、富安顧問、大野、秋元両副会長、安住理事長、有働、角川、岸各理事、五所監事、榎田進、中火臣、鷹羽狩行、柳田静爾、山崎ひさを、村井隆各建設委員。